

8月5日 ルカによる福音書8章26～39節

【解説と黙想】

レギオンを追い出す

この箇所の前には嵐を静める主イエスの御業が記されていた。主イエスは人間に外側から力を振るう自然を支配されると共に、人間を内側から支配しようとする悪霊の力にも勝利される。

舞台は「ゲラサ人の地方」である。それがどの場所を指しているのか定かではないが、それがデカポリス地方（「十の都市」を意味）に位置し、異邦人が住む地域であることは確かである。それはユダヤ人には汚れたものとされた豚を飼っていることからわかる。

そして主イエスのところに「悪霊に取りつかれている男」がやってくる。「悪霊」は現代のわたしたちにとってはなじみの薄いものだが、聖書は悪霊の存在とその働きについて明確に語っている。悪霊は神に背いて墮落した天使であり（ペトロ二2：4、ユダ6）、今も不従順な者たちの内に働き、罪と過ちを犯させる霊である（エフェソ2：2）。特にこの箇所に出てくる悪霊は「レギオン」（ローマ軍隊の名前であり、六千人の兵士から成っていた）と名乗り、多くの悪霊が彼に入っていたことがわかる。それゆえその症状もひどかった。「長い間、衣服を身につけず、家に住まないで墓場を住まいとしていた」。「墓場」は死体が安置されている場所であり、汚れた場所とされていた（イザヤ65：4、マタイ23：27）。悪霊は人間性を破壊し、その人を汚れた場所に留まらせ、「生ける屍」のようにしてしまう。そして悪霊はイエスが「いと高き神の子」であることを認識しつつ、ひれ伏して「かまわないでくれ。頼むから苦しめないほしい」と懇願する。この時点で悪霊は神の子イエスには勝てないと敗北を認めている。「かまわないでくれ」と訳されている元の言葉は「あなたとわたしに何の関係がある

のか」と訳すこともできる。悪霊はその人がイエスと関係を持たないようにさせる。そして悪霊は「底なしの淵へ行けという命令を自分たちに出さないように」イエスに願う。「底なしの淵」とは悪霊やサタンが閉じ込められる牢獄のようなところである（黙示20：1～3）。悪霊たちはそこに入れられることを恐れ、豚の中に入ることを願い、主イエスに許可された。しかし結局は多くの豚（マルコ5：13によれば二千匹ほど）の群れが崖を下ってなだれ込み、おぼれ死ぬことになり、悪霊たちも滅んでしまったと考えられる。

この出来事の結果、その地方の人々はイエスに自分たちのところから出て行ってほしいと願う。それは彼らが「すっかり（原文では「大きな」）恐れに取りつかれていた」からである。自分たちでは手の施しようもなかった悪霊つきの男が、服を着、正気になってイエスの足もとに座っているのを見て彼らは恐ろしくなった。また多くの豚の群れが死んでしまったということも彼らの恐れの原因だっただろう。彼らは悪霊にとりつかれていた人が救われたことを喜ぶことはせず、豚の損失に目を向け、イエスを追い出してしまふ。霊的な救いに無頓着であり、物質的、経済的なものにばかり目を向けている異邦人の姿である。一方、悪霊を追い出してもらった人はイエスにお供したいと願ったが、主イエスは彼に自分の家に帰り、神が自分にしてくださったことを語り伝えるよう言われた。主イエスを追い払ってしまうような異邦人の地域でおもイエスを通してなされた神の偉大な御業を宣べ伝えていく。それは自分自身が救われた彼にしかできない主から与えられた大切な使命であった。（坂尾連太郎）

《教理問答》 「子どもと親のカテキズム」 問3、12

8月5日 ルカによる福音書8章26～39節

【説教展開例】

レギオンを追い出す

◇..... 単元のねらい◇

人を汚れの中に留めようとする悪霊の働きを認識しつつ、主イエスはそれに打ち勝って救いの御業を成し遂げてくださることを知る。そして主イエスに救われた者には、自分が置かれた場所で、主から受けた恵みと救いを語り伝えていく使命が与えられていることを覚えたい。

「悪霊からの救い」

皆さん、おはようございます。皆さんは「悪霊」という言葉を聞いてどのように思うでしょうか。「あの人は悪霊にとりつかれている」という人を見たことがあるでしょうか。今の時代には「悪霊にとりつかれている」というようなことはほとんど言われないのだと思います。精神的な病気はありますが、それがすぐさま「悪霊にとりつかれている」ということにはなりません。では悪霊とは一体何なのでしょう。

今日の箇所には「悪霊に取りつかれた男」が出てきています。しかもこの人の中にはたくさんの悪霊が入っていました。この人は服を着ないで裸で過ごし、家に住まないでお墓に住んでいました。普通人はお墓に住むなんてことはしません。お墓はなんとなく怖い感じがするかもしれません。また当時お墓は死体が安置されているので汚れた場所と考えられていました。この人はそのような汚れた、死の香りが漂う場所に住んでいました。周りの人たちはこの人を鎖でつなぎ、足枷をはめて監視しようとしたのですが、それも引きちぎってしまいました。そのようにこの人は周りの人々からはもうお手上げ状態、どうしようもない人だったのです。

こう聞きますと自分は悪霊とは何の関係もないと思うかもしれません。確かに多くの悪霊に取りつかれこんなにひどい状態にはなっていないかもしれません。しかし、

わたしたちもまた「墓場」のような汚れた場所に行こうとすることがあるかもしれません。「汚れ」というのは聖なる神さまの前に汚れているということです。それゆえ聖なる神さまから離れ、罪や過ちの中で生きているならばそれは「汚れ」の中にとどまっているということであり、霊的には死んでいるということなのです（エフェソ2:1～2）。そしてそういうところに悪霊は働いているのです。

またこの男にとりついてきた悪霊はイエスさまに向かって「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい」と叫びました。悪霊はイエスさまが力ある神さまの子であり、このお方にはかなわないということを知っていたのです。だから「頼むから苦しめないでほしい」とお願いしました。また「かまわないでくれ」という言葉は「わたしとあなたとに何の関係があるのか」という言葉です。悪霊は自分を追い出し、苦しめるイエスさまと関係を持ちたくないのです。男に取りついたまま、墓場という汚れた場所で居心地よく過ごしたいのです。そのように悪霊というのはわたしたち人間がイエスさまと関係をもたないように仕向ける働きもするのです。

イエスさまがこの人に名前を聞くと、「レギオン」と答えました。これはこの人のもともとの名前ではありません。悪霊がこのように言わせたのです。「レギオン」とは

ローマの軍隊の名前で、六千人の兵士から成っていました。それほど多くの悪霊がこの人の中に入っていたのです。この悪霊たちは自分たちを「底なしの淵」に行かさないうように、滅ぼさないうように頼みました。そしてその近くで飼われていた豚の群れの中に入れてほしいと願い、イエスさまはそれを許されました。悪霊が豚の中に入ると二千匹ほどの豚の群れが一斉に崖をくださって湖になだれ込み、おぼれ死んでしまいました。結局悪霊は滅んでしまったと言えます。こうしてイエスさまは悪霊に取りつかれていた人を救われたのでした。

豚を飼っていた人たちはこれを見て逃げ出し、町の人たちにこのことを知らせました。町の人たちがイエスさまのところにやってくると、そこには悪霊に取りつかれて今までどうにも手をつけられなかった男がちゃんと服を着て、正気を取り戻し、イエスさまの足元に座っていました。町の人たちはそれを見て恐ろしくなり、イエスさまに言いました。「自分たちのところから出て行ってほしい」と。町の人たちは誰も悪霊に取りつかれていた人がイエスさまによって救われたということ喜びませんでした。それよりも自分たちの生活のために大切な多くの豚が死んでしまったということに目を向けていたのでしょう。そして自分たちでは手のつけようもなかった悪霊をも追い出してしまふ計り知れない力をもったイエスさまのことが恐ろしくなったのです。だから、もう自分たちのところからは出て行ってほしいと願いました。自分たちのこれまでの生活をイエスさまによって乱されたくないと思ったのでしょう。わたしたちが生きる日本もそのようなところがあるかもしれません。イエスさまによる人間の救いに目を向けることをせず、物やお金の豊かさを追い求めていく。そのような世界かもしれません。

イエスさまは舟に乗ってその地を去ろうとされました。そのとき、悪霊を追い出してもらった人はイエスさまと一緒にいかせてくださいと頼みました。しかし、イエスさまは彼に言いました。「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい」。イエスさまと一緒に来るのではなくて、自分の家に帰って、神さまが自分にしてくださったこと、それがいかに大きなことであつたのかを話して聞かせない、と言われたのでした。それはイエスさまによって救っていただいたこの人にしかできない大切な働きでした。しかし考えてみますと、この町の人たちは既に豚飼いたちから起こったことを聞き、成り行きを見ていた人たちから悪霊に取りつかれた人がどのように救われてたのかを聞いていました。それを聞き、また悪霊に取りつかれていた人が正常になったのを見たいので、イエスさまを町から追い出したのです。しかしイエスさまはこの町での伝道を諦めてはいませんでした。救われた人自身が自分の口で、自分が神さまから、イエスさまからどれほど大きなことをしてもらったのか、どれほど大きな恵みをいただいたのかを伝える。そのことを通して、その人の家族が、その町の人たちがイエスさまを信じるようになる。そのことをイエスさまは望まれ、そのためにイエスさまはこの人を自分の家に帰り、その場所で伝道するという大切な役割を与えられたのでした。

わたしたちも、それぞれの置かれた場所で、家や学校において、自分が神さまから受けた恵み、イエスさまがしてくださったことを語り伝えていく。そのような大切な役割がイエスさまから与えられているということを感じたいと思います。

(坂尾連太郎)

《今週の暗唱聖句》

自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい。(ルカによる福音書8章39節)

8月5日

【幼稚科】

レギオンを追い出す

〈ねらい〉

主イエスは、嵐をしずめ、人の心をもしずめてくださいます。イエスを信じ、お祈りする人の心の中には、聖霊なる神が住んでくださいます。聖霊は、神さまの子どもの歩みを力強く導き、守ってくださいます。お祈りの力、すばらしさ、安心感を教えましょう。

〈展開例〉

ある日、イエスさまはガリラヤの湖をお舟に乗って、神さまの国のすばらしさを伝えに行きました。すると、お墓をお家になっている裸の男の人が大声をだしながらイエスさまに近づいて来ました。お墓に住むって、楽しいのかなあ。違います。悪魔がそうさせていたのです。悪魔は、神さまが大っ嫌いです。悪魔は、人間が神さまを信じ、神さまに従うのも大っ嫌いです。悪魔は、人が神さまから離れさせるためにどんな悪い事でもへいきでしてしまいます。本当にいやですね。

この男の人は、神さまを信じていない人でした。だから悪魔が友だちになりやすかったのでしょうか。悪魔は、この人の心の中に、たくさんの友だちの悪霊を呼び込みました。神さまから離れると、お友だちや家族の人たちとも仲良くなれないのですね。

さて、悪魔はイエスさまが神さまの子どもだということを誰よりも知っています。ですから悪魔はイエスさまにまったくかなわないことも知っています。

イエスさまは、悪魔に「この人から出て行きなさい」と命じます。悪魔は言いました。「出て行きます。でも、せめて豚の中に入れて下さい」とお願いします。イエスさまは、するまにさせられます。すると、どうでしょう。どどどーと豚たちがいっせいに崖をめがけて走り出して、湖に落ちてしまいました。こうして、男の人は、心の中から悪魔を追い出していただき、代わりに聖霊なる神さまを心に宿すことができました。そして、自分のお家に帰って行きました。

いったいどうしてこの人の心の中に悪霊が住んでしまったのでしょうか。神さまにお祈りしないで、イエスさまを信じなかったからです。僕たち私たちは、神さまの教会でもお家でもお祈りできますね。お祈りする人の心の中には、神さまが住んでくださいます。その人に、悪魔は寄って来ません。僕たち私たちは、聖霊の神さまが心に住んで下さいます。うれしいね。

〈やってみよう〉

ガラスのコップに泥を入れます。かきまわします。悪霊が心の中に入っているイメージ。その泥を、捨てます。きれいに洗って、お水を飲んでみせます。

〈お祈り〉

天のお父さま、わたしの心の中に、聖霊で満たして下さい。いつも、イエスさまといっしょにいれるようにたすけてください。アーメン。

8月5日

【小学科上級・中学科】

レギオンを追い出す

1. ルカ8：26～34を読みましょう。

①イエスは、この町で誰に会いましたか。その男はどんな暮らしをしていましたか。

②イエスを見て、男はどんな行動をとりましたか。また、それはなぜですか。

③イエスはこの男に声をかけて、名前を尋ねられました。その名前の意味は何ですか。

④男がイエスに願ったことは何ですか。

⑤イエスがお許しになると、どんなことが起きましたか。見ていた人たちはどんな様子でしたか。

2. ルカ8：35～39を読みましょう。

①話を聞いた町の人たちは、イエスに何と言いましたか。

②悪霊を追い出してもらった男は、イエスに何を願いましたか。また、イエスは何とお答えになられましたか。